
ピュウラス

ラフティー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ピュウラス

【NZコード】

N0845D

【作者名】

ラフティー

【あらすじ】

一人の少女がもう一つの地球を救う

プロローグ

あなたはどこにだってある時空の扉をしつっていますか
これはそんな時空の扉を開いてしまった一人の少女の物語です

（プロローグ）

遙か昔、地球は2つあつた一つは自然豊かな青い星、もう一つは平和なる星、しかし2つの地球は対立をしやがて人々は争いだした多くの血が流れ、多くの憎しみが生まれた
いにしえの神々は地球を切り離した。一度と戦わぬようになると・。

しかし今そんな地球が再び繋がろうとしている、人の欲と憎しみで生まれた「あるもの」によつて・・・

あるものは美しく輝いている

あるものは人々を魅了する

あるものは戦いを起こした

あるものは

少女の運命を変えた

第1章～始まりの扉～

ジリリリリリリ

ガチャ

「・・・・ふあんん・・・・眠い」

今日もマンネリな一日の始まりだ、私はそんな気持ちで目覚めた

今日でこのマンネリな一日が終わることを知らないで

部屋をでて階段を降りリビングへ行く、テーブルには菓子パンと紅茶がでている椅子に座り食べようとしたらキッチンから兄貴がきた
兄「わりいな・今日はそれでいいか・」

申し訳なさそうに私を見る

「大丈夫だよ。兄貴は早く学校に行つて」

笑顔でかえす私

兄「明日は」ちやうにするからな「

兄貴はそつ言い残すと勢いよく家を出でいった

「・・・・あつあいつがまだ起きてない・・・・まあいいか・・・・」

あいつとは弟のこと、私の家には親という人がいない私が中学の時、兄貴が私たちに虐待をする両親とはもう暮らせないと私と幼かつた

弟をつれて出ていった

私たちは親戚の人人が使っていないという空き家に住まわしてもらっている

兄貴は大学生でバイトをして私たちを養ってくれている、私も高校に入つたので今はバイトをして兄貴の負担を減らしている

「・・・そつか今日はあいつは・・・何かで休みか・・・」

弟の学校が休みなことをおもいだしました食べ始める

ガタン

屋敷には誰も住んでいないそれに周りは住宅地なのにここだけ屋敷、

しばらく歩いてみると・・・いつもは気にせず通りすがるはずの
屋敷が目に止まる

そして私は学校へ行つた

見るのがいやになりドカッと物置に投げ込む

風祭 ブルー（カザマツリ）
誕生

ものが落ちた音がした
行ってみるとアルバムが落ちていた
写真が少しはみ出しているそして写真から覗かす両親の笑顔
この写真は私が生まれたときのらしい

考えれば気になる

でも私はあまり世の中を気にしないので通りすぎた

学校へつくと最近噂になつてゐる事件がみみにはいつてきた

友達「ブルー聞いた?また人が世界各地で消えてるんですつて!!!」

「・・・へえなんなんだよなあこの事件は」

興味なさげに会話をしていると

友達「一人とも!!!大変隣のC組の根岸さんとE組の滝くんがいなくなつたんだつて!!!!」

教室中がパニックになつたまさか自分の近くでこの事件が起きると
は誰一人思つてなかつたから

すると先生が教室に入つてきた

先生「みんなはもう知つてゐるな・・・」

教室に重い空気が流れた

男子「滝たちがいなくなつたんだうつ・・・・・」

さすが湯那本^{ゆなもと}冷静に答えている

そんなことに感心していると

女子「ゆりちゃん!!!!」

泣きながら根岸さんの名前を叫んでいる、たしか根岸さんは親友
の小林さんだ

先生「二人に共通することは・・・タベ・・・空き家の屋敷の前を通
つたことだ」

私は目を見開いた

やつぱりあの屋敷にはなにある そう確信した

授業は午前中に終わり先生たちは生徒に一人で帰らないこと屋敷の前を通らないことをいった

しかし私は大丈夫だ・・・けんかには自信があるし、屋敷の前の道以外は逆に暗くて通りたくなかつた

「この屋敷・・・ね」

私は屋敷を見上げた

湯那本「なにしてんだ? 拉致されたいのかよ?」

振り向くと湯那本がいた

「いやあうちもな・・今日の屋敷はなにかおかしい気がしたんだよ」

湯那本が私を家まで送るといいだした 一人で屋敷をあとにしようとしたら

門がゆっくりと開いた

湯那本「！？？なん・・だ」「わっ分かんない」

空は暗くなっていた まるで屋敷が闇に溶けてこるみたい

第二章～光～

第二章～光～

湯那本

「どうどうするよ・・・入るか？」

湯那本は恐る恐る私に聞いた 私は入つたら一一度と戻れない気がしたが好奇心を押さえることができなかつた

私たちは屋敷の中へ

なかは物が散乱していた奥へ進んでいくと階段があつた すると階段のうえの部屋から光が漏れていた

「湯那本・・・あの部屋から光が」

湯那本は私の声に反応し階段を見た

湯那本

「部屋？そんなどこにある？」

「えつ」

湯那本には見えないのか？いや確かに部屋は存在する私は一人での部屋へと足を運んだ

「真つ白だ」

部屋のなかは真つ白で前に扉があつた

時空を越えませんか

「えつだつ誰：」
しかし部屋には私しかいない

たくさんの人々があなたを待っています

救ってください

もう一つの地球を

流れ出す

彼女の血を

かくつてぐだれこ

声はまるで女神のように美しい しかしもつ一つの地球ってなに？

私はそんなことを考えながら扉に手をかけた
扉を開けると・・・・・

なかから光があふれてきて私は光を覆われた
そして扉とともに姿を消した

湯那本「?風祭?帰つたのか」

叫んでもただ彼の声が響くだけで返事は一度と帰つてこなかつた

第三章～空からの訪問者～

第三章～空からの訪問者～

今日も多くの仲間が死んだなんとか俺を入れた数人は軽傷ですんだ
が 明日を無事にむかえられるかは分からぬ
そんな毎日をおくつていた

俺たちは今日

奇跡を見る

アジトに帰ると数十人の人たちが俺たちの帰還に喜んでいる いつ死ぬか分からぬこの世界で帰還することは何よりも幸せ

オバサン「お帰りなさい。レム・・・」

優しくはなしかけてきた

レム「・・・酷い戦いだ」 ゆっくりと椅子に腰掛けて下を向きつぶやいた

オバサン「そうね・・・」 レム「なぜ世界はこのよつた戦いを」

レムは真っ直ぐオバサンを見つめた

すると奥から杖をついた村長のような人が現れた

村長「人というのは醜いものだ」

回りも静かなり村長のはなしを聞いた

村長「遙か昔・・・ 地球は2つ存在した。最初はお互いを思いやり協力をしていた・・・ しかし一つしか争いが始まりにしえの神々は一度と2つの地球が交わらないようにした」

レム「だからなぜ！――！」

村長「ピュウラスだよ・・・」

レム「ピュウラス！？しかしあれは存在しないものじゃ」

すこしの間沈黙が続いた

村長「ピュウラスは存在しない宝石・・・その理由は目に見えぬものだからだ。ピュウラスは人の願いを叶え幸せにすると言われていた・・・しかしピュウラスを人々はうばいあつた、自分が富を得るために」

村人「おい！！！空が光つてんぞ！！！」

一人の村人が叫びみなが外に駆け出した

空から一つの光が降つてきている

レム「人だ！！！」

よく見ると一人の少女が光に包まれながら降つてくる雲の隙間から
天使のように降りてきてゆっくりと地についた

俺たちは少女にかけよつた

第四章～選ばれし者～

第四章～選ばれし者～

なにが起きたのだろう

あ・・・れ・・・?

私扉を開けて

そう
落ちたんだ

私生きてる

? 「大丈夫か?」

人の声がする

私はゆっくり目を開けた

たくさん人がいる そして一人の少年が私に近づいてきた
しかし私は混乱しているのか少年から離れ 逃げようとした
が

村長「待たれよ。青き地球の者よ」

私はその人の言葉に足を止めた

「・・・あなたは誰?」

村長「私達は・・・もう一つの地球の者だ」

私は村長さんに私が空から降つてきただことや二つの世界について聞
いた

「じゃ何者かによつて二つの世界を繋ぐ道ができるんだ・・・あ
の屋敷に」

村長「お主で三人目じゃよ青き地球の者がきたのは」

「私で三人目? つてことはまさか! ! ! !」

私が話し出そうとした瞬間

「誰かキャッチしてくださいーい！」

ドスッ

湯那本「あれ？オレ無傷？」

「湯つ湯那本！？なんでここに…？」

湯那本「おつ！風祭！？生きてたか！？いやああの後探したぜ、お前も消えたかと…しかし扉を開いたら空だもんな…」

どうやら湯那本も同じ方法できたらしく

村長「…………ピコウラスが…呼んである

「「なんだって？」」

村長「ピュウラスに選ばれたのだ…」

「いや…たまたま来ただけだし…なつ」

湯那本「まあな…」

しかし村長は私達は選ばれたと言い張り ある場所に連れていぐと小さな家に連れていかれた

そして隠し扉であるう暖炉を動かし更に奥へ進む

すると

大きな壁画が見えてきた
絵は真ん中に大きな輝く丸いもののピュウラスと言われているものだ
ろう
ピュウラスを求めて周りで争う醜い人の姿が描かれている　そして
ピュウラスのなかに一組の男女がいる
幸せそなうだがなにか悲しげだ

村長「この二人はいにしえの神々に選ばれ、争いを止めた二人じゃ」

私は壁画に寄りかかり目をつぶり考えた

私は選ばれたの だから

だからなんだ！…僕と逃げよう！…なぜ君が死ななければならぬ
んだ

世界のためよ

ダメだ！！行かないでくれ

第五章 チームワーク

第五章 チームワーク

湯那本「？？？大丈夫か風祭？」

「・・・・・えつ？あつうん」

（なんだつたんだろ？）

村長「この男女は青き地球の者だ・・・だから」

「まあ分かった。でもさあ」

湯那本「なにすけばいんだよ？」

私達は今この村の真ん中にある建物の階段を上つてゐる
村長「こいつらと共にピュウラスを探してほしいのじや」

そういうと階段の奥の扉を開いた

レム「ヨホ、サツキノヒトタチ」

湯那本「なぜにカタクト？」

「ケンカ売つてんのか？あ、あ、？」

レム「・・・・・」

「シカトか！……」

村長「まあまあ一人はこのパーティに入りこれからピュウラスを探してもらうのじゃから仲良くせい！」

そして自己紹介が始まった

まずはメンバーの紹介が始まった

最初に私たちの隊長の紹介らしいが・・・

レム「ああ俺が隊長だ、異議のあるやつは？」

スウ

私は手を揚げたが周りのやつらも揚げていた、いじめ？

?「レム感じ悪いから隊長ダメでしょ」

赤毛の男がへラへラしながら話した

リィーズ「あつ俺はリィーズ ヨロピク」

ウインクしてるし・次に銀髪の男・・・まともな頭のやついないのか心でつっこんだ

ルギ「ルギだ・・・ヨロシクはしない・・・」

湯那本「どんだけえ」

しかしスルーされている

最後に長い黒髪の女人が話した

ララ「フフフ・・ララよ。宜しくね」

感じのいい人だけ是非とも仲良くしたいものだと思つていいたら・・・

レム「・・・ララは男だからな・・・」

私のなかで何かが崩れた。

湯那本「大丈夫か?」

こうして、私達は旅立つことになった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0845d/>

ピュウラス

2010年10月28日05時27分発行